

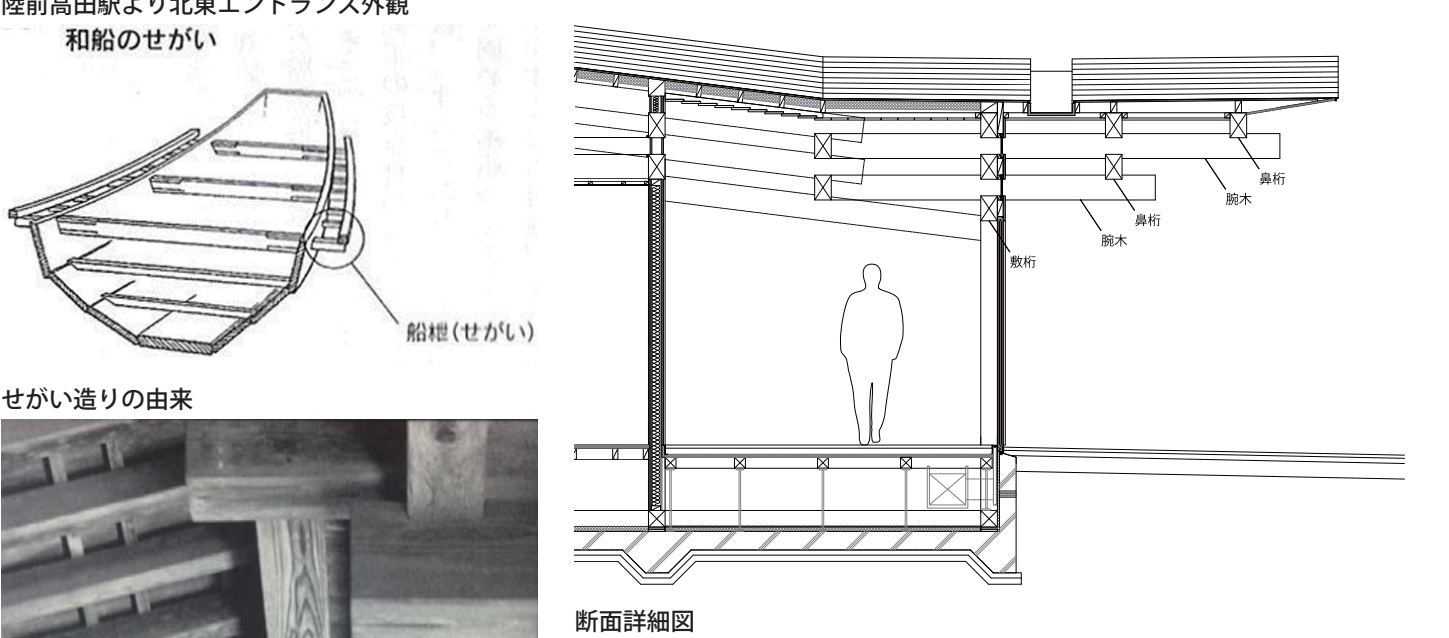


概要

東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田の新たな中心市街地に立つ複合型コミュニティ施設。地元の観光物産協会による観光案内所、社会福祉協議会によるくらし応援窓口、障がい者の就労を支援するあすなろホームによるはびなるカフェ、子育て支援施設のきらりんきっずの4団体が入居する。入居する4団体は設計当初より決まっており、入居者との対話を重ね、要望を丁寧に聴取し、その要望を出来る限り実現することで、入居者の満足度の高い施設が生まれた。

周辺環境との調和

施設の構成としては、山並みと調和する一枚の大きな屋根で全体を覆い、東西に空間を二つに分けながら、建物の中央に長屋門と呼ばれる陸前高田の海と山をつなぐ、大きな孔をあけることで、自然、街、建物、人を調和させた。屋根の上には、長屋門から外部スロープを昇り、陸前高田の海や街を一望できる展望テラスを設けた。展望テラスはトークショーや音楽会にも使うことができる。



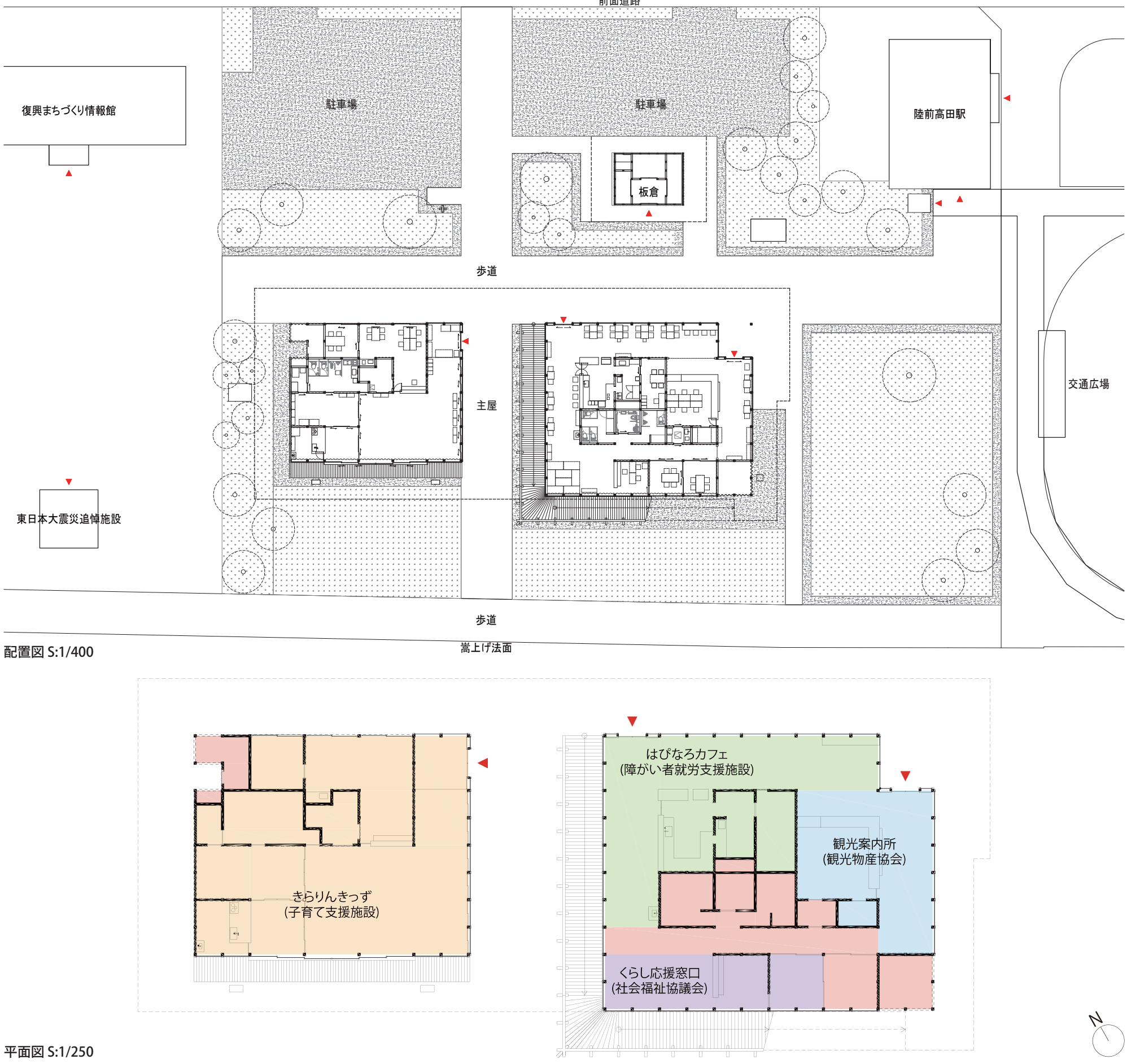
二段螺旋せがい造り

地場産材の気仙杉を用いながら、地元に伝わる気仙大工の技術を最大限に活用することで、陸前高田ならではの歴史や文化を感じさせる建物とした。具体的には、腕木を外に持ち出し、軒の出を深くする、せがい造りと呼ばれる気仙大工ならではの構法を応用した。せがい造りは梃の原理を利用することで深い軒の出を実現し、軒の出を深くすることで、夏の日差しを遮り、雨風から外壁を守り、軒下に縁側を創出する。まちの縁側では、せがい造りを継承するだけではなく、外部スロープと屋根を連続させ、腕木を螺旋状かつ二段に組み上げる二段螺旋せがい造りに伝統を進化させた。外部スロープの手摺にも、せがい造りを応用することで、螺旋せがい造りを強調しながら、建物の外観に特徴を与えた。また、木組みを内勾配にすることでよじ登りを防止し、特殊液体ガラス塗装を施すことで、雨掛かり部の木材の劣化を防止している。



気仙大工の復活と技術の継承

木材の加工組立には、機械を用いるプレカットではなく、気仙大工による墨付け、手刻み、建て方を採用した。そうすることで、実作を通じて、気仙大工が復活する場や、技術を伝承する機会が生まれ、歴史的な意義、文化的な意義、復興の意義を与えることができた。日本の誇れる気仙大工の技術や文化を、後世に伝える建物を残すことができた。



大きな縁側

二段螺旋せがい造りで四方に創出した軒下空間と、長屋門に面する外壁をガラス張りにすることで、内外の空間が水平、斜め、奥に連続する、建物全体が縁側のような、今までにない空間の連続性を有した大きな縁側が生まれた。この大きな縁側で市民の交流が育まれ、地域のコミュニティが再生されることを期待した。



空間の広がりと流動性

内部では、小屋組を現しにすることで、気仙大工の技を魅せながら空間に広がりを与え、天井の板を屋根勾配に沿って段々に張ることで、螺旋せがい造りが持つ、空間の流動性を強調した。

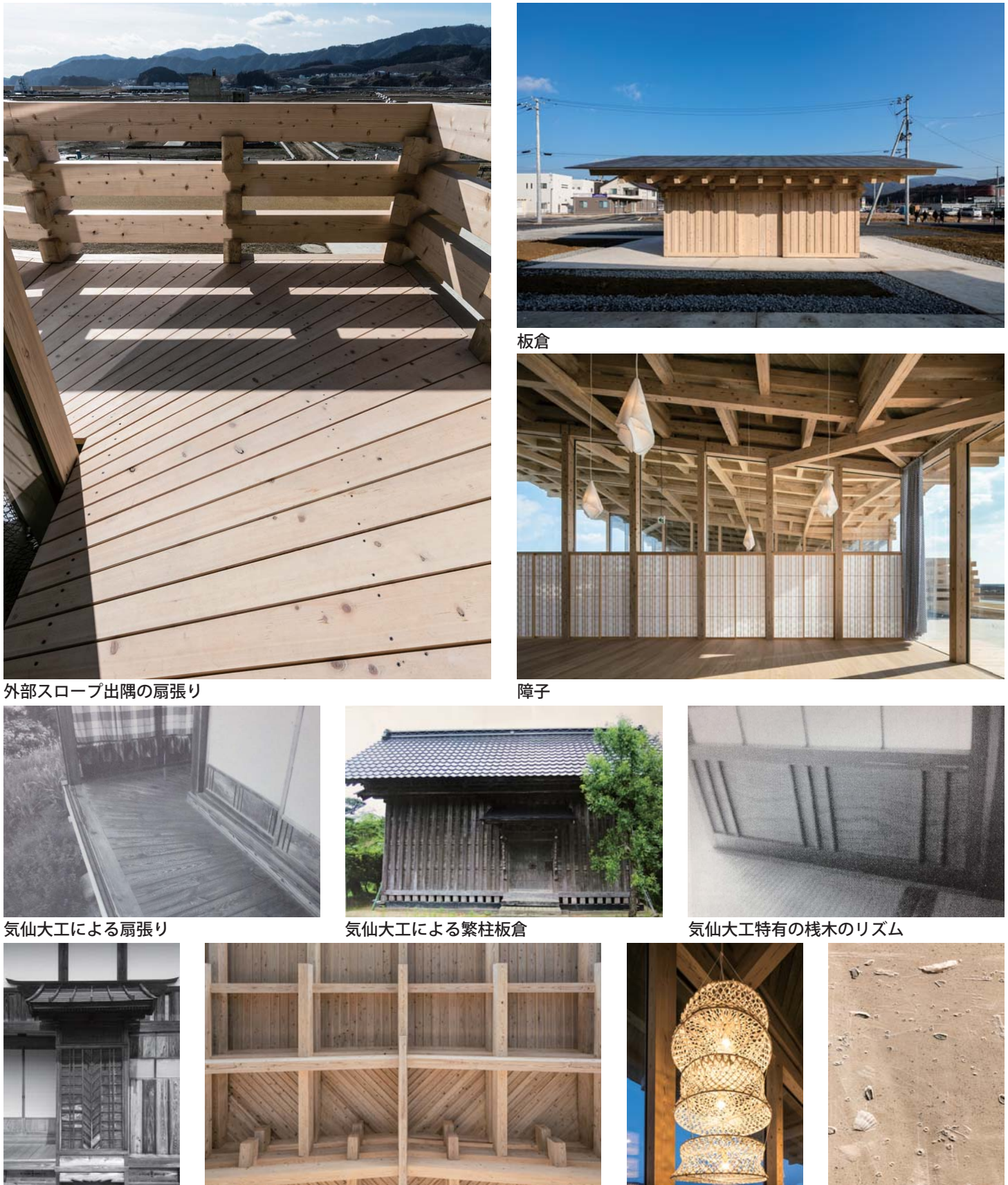
光・木・布

インテリアでは、柱や桁、壁に気仙杉をふんだんに用いるだけではなく、ファッションテキスタイルブランド minä perhonen の皆川明氏と協働し、カーテンや障子、ペンダントライトや家具に、刺繍を施した、柔らかくてやさしい布を用いた。四方から入る柔らかい光、木や布の暖かくてやさしい質感により、明るくて開放的で居心地の良い空間が生まれた。



ガラスの真壁造り

外壁のガラスでは、単に高透過ガラス（倍強度複層）を用いて透明度を高めるだけではなく、ガラスの真壁造りのような構成としながら、欄間をガラスにすることで、今までにない内外の連続性＝透明性が実現した。昼間は、外から内に、小屋組や天井を含めた室内全体に柔らかい光が差し込み、夜間は、柱や桁が陰になり、腕木や軒裏が照らし出されることによって、螺旋せがい造りが強調された。柱と桁の外側にステンレス製の枠を取り付けて高い気密性能を確保しながら、杉板を化粧で表面に張るディテールにすることで、木造を活かした新しい表情が生まれた。



陸前高田特有の歴史や文化を感じさせる仕掛け

その他には、気仙大工特有の意匠である縁側隅部の床板を放射状に張る扇張りや、気仙地域に点在する繁柱形式の板倉、障子の縦棧を中央に三本、両端に二本配置する気仙大工独特のリズム、戸袋に見られる板を斜めかつ鱗状に張る意匠の天井への応用、地元の牡蠣の養殖かごを和紙で漉いたペンダントライト、地元の牡蠣やホタテの貝殻、気仙川の川石を混ぜたコンクリート床など、陸前高田ならではの歴史や文化を感じさせる仕掛けを散りばめた。